

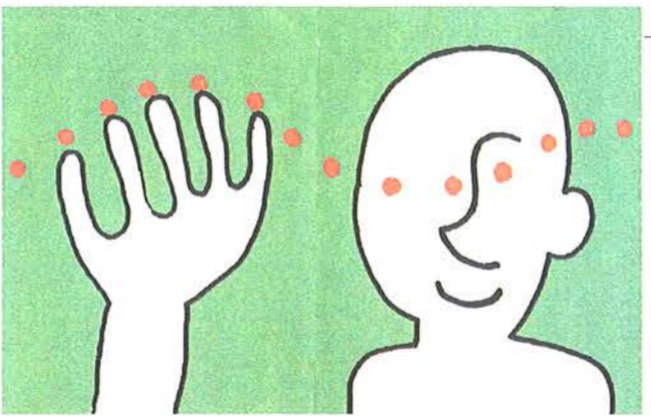
ロッキン・ドット (特許)

奇妙な現実

「現実とは、いつでも作り話以上に奇妙なものだ」。ロマン派の大詩人バイロンが、十九世紀初頭に書いた言葉だが、現実の奇妙さが増しているおかげで、この名言は古びて色あせるどころか、一層鮮やかに今を捉える。例えば、次のような現実がある。

カナダのサスカチュワン州に住むパーシ・シユマイザーは、十代のころから農業に携わり、広大な耕地でナタネなどを五十年間にわたって栽培してきた。自家採種を繰り返しながら、土壌と気候に合った強い種子を開発して、それが農家としてのライフワークだった。ところが一九九八年に、モンサントという米国の巨大バイオ・ケミカル企業から突然、彼は訴えられた。

モンサント社が特許を持つ遺伝子組み換えナタネを、シユマイザーさんが違法に契約料を払わず栽培したというのだ。「遺伝子ポリス」と呼ばれるモンサントおほかえのパトロール隊が、シユマイザーさんの畑に無断で入りナタネを探り、調べた結果、特許侵害のDNAが含まれていた！シユ



え・田中 靖夫

マイザーさんは逆にそこで、遺伝子組み換え汚染によって自分のライフワークが、台なしにされたことを知った。花粉が風で飛んできたにしても、鳥が種を運んだとしても、あるいは運送中のトラックから零れたものであっても、その人工的遺伝子が一旦、純粋な種子のそれと交雑したら、取り除くことはできない。そんな被害に遭った上で、加害者側から賠償を求められて、シユマイザーさんは法廷に引きずり込まれた。

人間の遺伝子に置き換えるならば、こういう話だ——。オレのDNAはオレのものだから特許を取る。それから見知らぬ女性を暴行して妊娠させる。十月十日ほど経つて子がオギャーと出てくると、今度はその女性を訴えて特許侵害の賠償請求をする。

シユマイザーさんは第一審で敗訴、控訴審でも敗訴して、最高裁まで戦い、最終的には賠償金を払う必要はないと、彼の主張が認められた。しかし同時に、モンサント社の特許権も認められた。

こんな現実が日本でもはびこる前に、遺伝子組み換え作物の上陸を阻止すべきだ。

